

## 人と語る

著者	松村, 二郎
雑誌名	龍南
巻	2 1 3
ページ	3 8 - 4 7
発行年	1930-03-10
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2298/6944">http://hdl.handle.net/2298/6944</a>

人　　と　　語　　る

松　村　二　郎

五高校長溝淵先生に捧ぐ

吾先生に逆ひ

先生吾に沈黙の教を給ふ

今吾向上の糧を得たり

夫れ流水は淡々として味無きが如し

されど吾その中に無限の生命を感じ

時にありてか激動し

静まるや又實に裕々然たり

激にして激にあらず

寂にして寂に非ず

無にして無にあらず

而かも洋々として地球の一角を永劫に流るゝもの

吾その心境を愛し

吾その無味の有味を愛す

## 野村千尋君へ

友よ

君はぼくが解かると云ふ

その様にも思へるが

そうでないとも思へる

でも、ぼくは生來猜疑心が強い

それをどれ程悪んだことか

然しどうすることも出来ない此の性根なのだ

ぼくの宿命に暗い陰があつたかどうか

それを知る由もないぼくが

限り無い情愛に育まれて

この様に不足無く成長して來たぼくが

父母の

そうして祖先の血にどれだけの秘密があつたにもせよ

譯もなく

愚痴を云ひ恨を云つてよいものか

凡ては宿命から

凡ては此の憂愁から生れるのだ

友よ

それでも疑ふ間はほくにも意識がある

解かつてくれることは君の勝手だ

解かつて貰へなくとも結構だ

人間はお互に數億年の哀しい宿命を持つてゐる。

それを意識して探らう／＼とすることは

ほくにはもう耐へられない

疑ふことは醜いほくの性根に眼を向けることになるのだ

ほくは運命に服従したい爲に

父母への忠實な子でありたい爲に

ほくはほくだけの世界に生きやうと思つてゐる

ほくの世界に入らうと入るまいと

ほんとうに夫れは君の勝手だと云ふ

ほくはほくだけの世界に生きやう

他人に強ゆる時は又醜い性根に歸らねばならぬ

ほくにはもう

此の上一步も祖先の血をあばく事はどうしても出来な事だ

友よ

勝手な奴だと君は思ふだらう

いや

それでこそ君は嘗て悲慘なる絶交をさへ宣言したのだ  
怒りもし恨んでも見たが

ぼくは結局一言の辯解もなく君を許した

淋しかつたぞ 唯一人の友に迄叛かれたぼくは

だが 不思議にもぼくはあの或大きな重荷を降した後の

そうだ あのゆつたりとした靜安な氣分に觸れる事が出来た

之がほんとうだ

君は今ほんとうに僕を知つたのだ

そうだ ぼくはもう僕以上に見られることに耐へられない

ぼくは ぼくは

君の再びぼくに歸つて來ない事を願つたが――

友よ

此の頃ぼくは自ら偽る事のどれ程つらいかを知つた  
ぼくはぼく以上の評價で自らを賣らうとし

凡ては此の過剰評價の上に立つ取引ではなかつたか？

此の取引を好調に導くための努力心痛

あゝ ぼくは自ら煩悩の墓穴を掘つてゐたのだ

そうだ

裸になれ執るべき道は

そうして生き／＼と生きる道は

只此の一つあるのみだ

ぼくは僕の生活をこゝに立て

汗みどろになつて

凡ゆる障害と戦ひ

虚妄の心を征服して行くぞ

友よ

ともすれば弱くならうとする僕の心は

重たい宿命 あゝ憂鬱の影に導かれて踴まされる

憂鬱 憂鬱

あゝ 重たい宿命だ！

ぼくは次第にエゴイストに狂人に！

そうして 眞實の自分に裸に！

自己完成に近づいて行くのだ

友よ

君はぼくが解かつたと云ふ

愉快な奴だ 無邪氣な奴だ

そう思ひ直して君は又始めに後戻りしたのではなからうか

君がぼくに歸つて來たことは

くどい様だか 却つてぼくにはつらく思はれる

友よ いつも楽しく歌つてゐる男

君は その男はなぜ歌ふかを知つてゐるか？

えゝ馬鹿な奴だ 云つたとて何にならう

ぼくはもう何にも云ふまい。

君は現にぼくの懷に歸つて來てゐるのだ

だが ぼくは

もう君を恐れる事を止めるぞ！

倦きが來たら遠慮なく又ぼくを捨て去るがよい。

友よ、

遠く離れて語る合ふべく等の言葉は

何と美しい心情に溢ふれてゐることか

君は僕によつてオアシスを求めると云ふ

僕は君に、君は僕に逢ふことによつて

互に知り合はうと云ふ

あゝ それなのに

二人幾月か毎に逢ふ時々僕等は又どうした事か

一言 二言

それもきまつて月並な會話に終るとは

友よ

沈黙の中に眞の理解があると云ふか

君は概念の交りで満足出来るのか否不安を感じないのか？

ぼくは未だ握つても見ない君の手から人間の不信實



そう云つたものを感じて冷たい豫感に戦慄を覚えるのだ  
そうして又ともすればぼくは自から君から離れて行かうとする  
假面！ 假面！ そうだ假面に違ひない  
君はどうして此の腐れ壁を取り去つてくれないのか！  
どうして裸になつてくれないのだ

友よ

つまらない言葉の上で

僕はは君に優越を願ひ

君はぼくに敗けまいと反抗し

互に強情を張り合ふことが

どれだけ僕等の益になるものぞ

かくては忠言も讐にこそなれ尙上の糧にはならないのだ

ぼくはさうした態度を見せられる度に

親友だと云ひ合ふことがたまらなく嫌になつてくる

小さな茶飯事の上で互が負けまいとする假面虚榮は

もう大低に止めやうではないか

ぼくは黙つて君に従ひ

君は黙つてぼくを許すことによつてこそ  
沈黙の中に眞の理解があると云へるのだ。

友よ

愛する友よ

ぼくは君を君はぼくをお互に敬愛して行かう

敬愛することが出来ない様では互に早い中に分れるがましだ。

沈黙の中に於ける敬虔の念

それが余りに僕等に缺けてゐたのではないか？

友よ 假面は捨て去つて行かう

心の信實を生かして行かうぞ！

世間並の概念の交際はぶち壊して丁へ！

その時ぼくらには一言の言葉も多岐なる親切も不要であらうし

十年の別離も苦になることはないのだ

十六億の人間に叛かれた時

抱き合ふものは君と僕の二人限りなることを忘れずに行かう。

上田敏夫君に

吾一大偉人を要す

吾それに忠實ならんのみ

吾下に立つ能はず

吾上に立つ人物にも非ず

吾獨り苦笑し

君之を笑はざりき